

あを 8

2016





版画 武井石艸

どこからか緑がせめぐビールかな
緑明りのはや風鈴が音をなす

堀内一郎

水音 昭和 41 年 6 月

あを

八月



捨鐘

東京

佐藤 喜孝

トマトに花考へながら用を足す
梅雨穴や天は動きて竜を生む
七月や打楽器奏者まだ立たず
捨鐘をききもらしたる白蓮
手首まで入れて遊べる夏の海

東京

篠田 純子

祭

ルーティーンして熱き銭湯子どもの日
紫陽花や若き妊婦とすれ違ふ
猫背反りどぜう隠元ぽきと折る
祭行列士卒の脛の逞しき
エエーンヤリヨイと木遣祭の終はりけり



石川 定梶じょう

びわ

葱坊主さういふわけで山を売り
梅雨懈しぼんぼん時計鳴ればなほ
絶筆の赤かも夕やけ早梅雨
梅雨の蠅打つにちからや且つ逃がし
びわの実や買はむともへばもう愉し

埼玉 須賀 敏子

六月

木道の少し傾く山開き
夏浅し今日の日付のママレード
一日を黄梅青梅ジャムにして
ふいに雨今日沖縄は慰霊の日
梅雨時の彫刻の森ピカソ館

埼玉 竹内 弘子

母のにほひ

新しい卒塔婆の下の青みかん
強風に生まれし蝶の翅炎ゆる
たばこ火の遠ざかりゆく苗代寒
花篝ひとにはぐれて人混みに
梅雨ふかし灰のにほひに母のにほひ

東京 田中 藤穂

蛭

ゆふぐれを吸ひ紫陽花の青深し
熊本城の石垣崩れ梅雨つづく
梅雨ぐもり名のみ残れる蛭坂
業平忌老ゆれば迷ひなき月日
蛭火のしづまりてまた星空に



石川 中川句寿夫

水飢饉

水打つて話はそちらさま次第
かにかくに社長は妻で父の日よ
早苗饗の夜より始む稽古獅子
鯰飼ふ駅長ほかみな顔見知り
ひらひらと尼さまが往く水飢饉

三重 長崎 桂子

六月

行き帰り山法師の花輝けり
新緑の空広闊に最な青
一段と車道騒がし朝曇
六月の雨風轟く慌ただし
夏負けの友の衰へ同窓会

東京 森 直子

知らぬ間に

知らぬ間に咲いては散つて夏椿
亡き人に紫陽花の色日々に濃く
着膨れし後姿を人混みに
若者を吐き出す門や青嵐
すこやかなれ瑞穂の国の梅雨前線

東京 森 理和

鬼百合

蔓薔薇の白が飲み込む梅雨曇
卓上に庭の鬼百合反り返る
梅雨入や画廊の金魚絵の中に
十二本ふらふらと花擬宝珠
留守居して熱く濃いお茶梅雨曇



東京 赤座 典子

さくらんぼ

織元や床にどっかと山法師
しぶき浴ぶ築番の脛しらじらと
梅雨寒や赤提灯待つ昏き街
僧院の鉄柵続き花海桐
悪い子も良い子になつてさくらんぼ

埼玉 秋川 泉

梅雨のかほり

短夜や見える見えぬと星談義
夏茱萸のかすかな甘さピアノバー
走り梅雨田んぼの苗の匂ひたつ
ダービーの胸の高鳴りファンファーレ
新緑の北京 P M 2・5

山梨 井上 石動

☆

ぬか漬けの碧く漬けたる誉かな
ソーダ水ギャルソン・ニノの髭細し
出来たての朝風に揺る蓮の花
落柿舎に遺るひとの香竹落葉
いつときの雨の入日や金魚玉

埼玉 大日向幸江

睡蓮

一本足立つ白鷺や青田風
迷ひなくセロリ音立て食したる
たわわなる乳房をもちてアマリリス
丹念に磨く皮靴父の日の
モネの睡蓮静寂に石を投げ



東京

佐藤 恭子

ほたる

昨夜の雨あぢさゐ珠を抱きつつ
絶巔に雪を残して梅雨入す
またたきて星をさそひし螢かな
螢の月にとけゆく高みかな
夜夜猫の尾を引く声や梅雨入す

東京

七郎衛門吉保

夏木

樹木墓地槐の元に母還る
山藤の杉にかかりて花提灯
親代り葉に守られて桐の花
此処彼処羽衣掛かる山法師
玉の葉ときそひがほなる花石榴



七月作品より

篠田純子・佐藤喜孝

白蝶のあんなに遠いところかな

佐藤 喜孝

白い蝶がついさつきまで、身の近くに居たのに、いつの間にか遠いところをとんでいる。「あんなに遠いところかな」と言う詠嘆に、魂の所在のはかなさを感じ共感いたしました。(純子)

はしゃぐ声保育園でも五月病

七郎衛門吉保

ゴールデンウィークが過ぎた頃から、発症が見られる五月病。新入学の生徒や、新入社員に罹り易い病と思っていましたが、保育園でも見られるようです。はしゃぐ声と、拗ねている五月病の子との対比が、面白い句になりました。

(純子)

イカリワク怒り湧く度ビール飲む

篠田 純子

友人の斉藤裕子さんへの思ひ出である。怒りが激しいほど虚しさを覚える。

掲句から離れるが、裕子さんの俳句に対する態度に教へられっぱなしである。疲れや仕事の多忙さを言い訳にして時間がないと作句を怠けがちになると、裕子さんのことを思ふ。そして裕子さんに申し訳ないと自分に活を入れること屢々である。いま裕子さんは私の先生である。

(喜孝)

狛犬の耳立て尾立て日雷

定梶じょう

あたかも狛犬が、日雷の不穏な空気を感じているかの様でユーモラスです。作者の心も

ちょっと逆立っているのが、狒犬の耳や尾の感じと重なり合うようです。(純子)

実在論白紙へ羽蟻落ちにたり

定梶じょう

「実在論」とは忘れてゐた懐かしい語彙。と
いつて特別勉強したわけではない。依つていま
ではどんな論だったか全く記憶にない。分厚い
河出書房新社の世界思想全集の外箱が微かに遺
るのみだ。実在論への作者の関りは私とは
まったく違ふ筈。白紙の上に落ちてきた羽蟻の
具さな姿と、実在論。なぜか腑に落ちるところ
がある。

「にたり」は見慣れぬことば。少し調べた。「た
り」は完了の助動詞とはいっても、存続の意味
しか表さない。」とあった。「実在論」には「に
たり」だなあと実在論の何かを弁えてゐないの
に納得した。納得の仕方が間違へてゐてもじよ

うさんがゐるので安心して書いてゐる。「敷栲
の枕は人に言とへやその枕には苔生しにたり
万葉集」がわたしのデータベースにあった。
俳句ではじょうさんしか見つけられなかった。

(喜孝)

細き人太き人にも夏来たる

須賀敏子

水分を摂り過ぎて、食欲が無くなる痩せた人。
方や水を飲んでも太ると言う人。クーラーに弱
いひと、汗かきの人。さあ、夏との戦いの始ま
りです。(純子)

単純化ほど俳句をおもしろくする要素はな
い。万人に避けることなく夏が来る。なのに言
い方を変へ「細き人太き人にも」といふとおも
しろくなる。(喜孝)

できたてのコピーがにほふ夏期講座 竹内弘子

最近都立高校の、公開講座に参加したので、
この句を身近に感じました。コピーの匂いを捉
えた作者の繊細さと、常に学ぶ意欲を持ち続け
る姿勢に、挑発されています。(純子)

目覚めては病む友おもふ若葉雨

田中藤穂

谷中の吟行の帰りに長久院というお寺に、藤
穂さんのご友人を訪ねて、一緒に立ち寄らせて
いただいた事がありました。身のこなしの華や
かな方で、嘶家さんのお墓や、彰義隊が立てこ
もっていた時の、門に残る鉄砲穴などを見せて
頂きました。その方がご病気になるかと聞き
ました。若葉雨が作者の心の中にも降っている
様で、しんみりしました。(純子)

吸ひ呑みが転がつてゐるはたた神

中川句寿夫

事件、事故の匂いを感じました。病人が人事
不省に陥ったのか、はたまた雷鳴に失神したの
か。畳の上の吸ひ呑みに、稲光りが青く突き刺
さり…。想像がふくらみ、心臓がドキドキして
きます。(純子)

衣の軽く歩みも軽し五月かな

長崎桂子

五月ともなれば、肌寒い日も無く気分が爽快
になります。衣服や足もとより、一番軽くなる
のは「こころ」なのでしょうか。明るく、前向
きな印象をうけました。(純子)

葺替へ中屋根に数人文化財

森理和

最近、屋根替が春の季語である事を知りまし
た。文化財の建物の上に乗る事が出来るのは、

葺替えの時からいでしょうか。良い場面をご覧になったなと思いました。(純子)

夏木立シュプレヒコールのラップ調 赤座典子

昨今のデモは世代を超えています。若者のシュプレヒコールに、中高年の参加者が呼応します。「民主主義っていいね」と若者。「いいね」と中高年。(純子)

原発の伊予の里から夏蜜柑

秋川 泉

核融合で作りますエネルギーと、夏蜜柑を大きく育てた太陽エネルギーとの対比を感じました。日本は電気も水も豊富で、ちよつと傲慢になつてゐるかなと、日々の暮らしを反省しています。原発に頼らず、太陽エネルギーに頑張つて欲しいと思いました。(純子)

まつり果て諏訪の上社は青嵐

井上石動

祭が終わると寂しい。子どもが幼かったころ、ソースせんべいや、ピンクのヨーヨーを欲しがり神社に行きたがる。祭は毎日あるわけでは無い、と言う現実を教え寂しさを共有した。作者は、御柱祭の喧騒を青嵐の中に聞き、新しい御柱を見上げています。(純子)

すると顎が食べてるところでん 大日向幸江

顎がするすると伸びたり縮んだりして、短時間にとろとんを、食べ終えてしまった感じがしました。面白さと涼味が伝わりました。(純子)

本流も支流も本湍さくらかな

佐藤恭子

さくらが咲いているのに、作者の目は川に釘付けです。水の流れが激しいことを句にしてい

て、季であるさくらには集中しません。しかし本湍と言う語彙に心惹かれ、何度も読み返すうちに、春の勢いのある水流と、添え物めいた川縁の桜が見えてくるのです。作者独特の俳諧と鑑賞いたしました。(純子)



俳句界 2016年9月号

【大特集】
さらば「萬縁」
——中村基樹と「萬縁」の時代
ロイヤル・金子亮太 中村可子
○オサキ 横田田子
○「萬縁」アルパカ 中村基樹
○中村基樹 内村陽子 穂坂香枝夫
○中村基樹 中村陽子 穂坂香枝夫
○「萬縁」の人々 ○中村基樹 佐藤恭子

【賞金】
○俳句 賞金 三万五千円 佐藤恭子
○俳句 賞金 三万五千円 佐藤恭子
○俳句 賞金 三万五千円 佐藤恭子
○俳句 賞金 三万五千円 佐藤恭子

【編集】
有馬朗人 大関晴博

【発行】
株式会社文学の森

TEL 03-6282-9196 URL http://www.jungak.com/

白鷺の影を捨てたる高みかな	佐藤喜孝
はしやぐ声保育園でも五月病	七郎衛門吉保
イカリワク怒り湧く度ビール飲む	篠田純子
実在論白紙へ羽蟻落ちにたり	定梶じょう
細き人太き人にも夏来る	須賀敏子
できたてのコピーがにほふ夏期講座	竹内弘子
五月来ぬ海山見たき望みあり	田中藤穂
水番が謝つてこと治めけり	中川句寿夫



衣の軽く歩みも軽し五月かな	長崎桂子
葺替へ中屋根に数人文化財	森理和
住みし家様変りして氷菓売る	赤座典子
原発の伊予の里から夏蜜柑	秋川泉
五月雨はひかる舗道へ夜の都会	井上石動
泳ぎ着く子猫ボートに助け上ぐ	大日向幸江
本流も支流も本湍さくらかな	佐藤恭子



比来披見

ホトトギス 七月号

七月四日 芦屋ホトトギス会

咲き終へし月下美人の朝となる

稲畑 汀子

通し鴨人の生活の端を占め

稲畑 廣太郎

沖 七月号

菖蒲葺く座高測定廃止とや

能村 研三

雨月 七月号

安曇川の流れに沿ひて鳥帰る

大橋 暁

槐 七月号

影踏みの影げんげ田に逃げ込みぬ

高橋 将夫

馬酔木 七月号

札幌三岸好太郎美術館

淋しさの炎となりて花さびた

徳田 千鶴子

風土 七月号

畝作る鋤にてしばし野蒜掘る

南 うみを

末黒野 七月号

一齐に風む捉えて舞ふさくら

小川 玉泉

春宵や人差指で打つピアノ

松本 三千夫

雲の峰 七月号

深吉野や真夜も青葉の香を満ちて

朝妻 力

萱 七月号

しづけくもしげくゆたけく花の散る

木村 嘉男

老いてゆくことにも馴れて夏帽子

亀田 虎童子

白地着て切口上となりけり

小島 良子

朝 七月号

夏けやき樹齢五百の中にわれ

岡本 眸

霽 七月号

一日雨上向きしまま見届けし

松林 尚志

青芝刈る一人を配し美術館

藤田 宏

集 七月号

触れなんとすれば牡丹の芽が拒む

大山 夏子



京鹿子 七月号

車座の一男三女柏餅

鈴鹿 呂仁

六花 七月号

蛇さへも懐かしく見ゆこの頃は

山田 六甲

鳴 七月号

坂下る暮春の家並そして空

井上 信子

ほんたうの秘話は秘のまま花の城

高橋 道子

空 七月号

廻りつつ青蠅の流れゆく

柴田 佐知子

万象 七月号

九十を越え産土の花の下

大坪 景章

春燈 七月号

新橋演舞場東をどり

終幕の口上こそは涼しけれ

安立 公彦

やぶれ傘 六月号

針金の柄がぐにやぐにやの蠅叩

大崎 紀夫

こだま 六月号

薔薇に釘幾たび打たば奇跡起つや

松林 尚志

面 一二〇号

改憲おしくら是否や閑話休題さくらんぼ

高橋 龍

小椋川

啓蟄や登りたき木があるにはある

高橋 龍

中山は左廻りで春が来る

われは俳人二十面相春の坂

三月や恩師の煙草吸う写真

助詞のくるひ一ミクロンに花疲れ

持出して夏野に向ける椅子五脚

我おもう故に夏あり暑さあり

特攻もトイレも一步前へ出よ

自由律わきて短律かまど馬

梧桐にコーンコーンと月の音

(喜孝抄)

俳境流連

いつの世も左まはりにをどりの輪 純子

先日、青山の秩父宮ラグビー場前庭で、郡上八幡踊りがあると知り行ってみた。大きめの櫓の内には太鼓、三味線、笛、唄い手と八人程の囃子方で、「♪郡上のな〜八幡出て行く時は 雨も降らぬに袖絞る…」聞き覚えのある節だ。地元からの踊り手さん達も来ているらしく、上手に踊られていた。丁度金曜日だったので、会社帰りのサラリーマンや、女性も、見よう見まねで楽しそうなので、私も参加してみた。単調な踊りなのだが、コツが掴めず容易でない。早々に踊りは切り上げ、ビールを飲むことにした。郡上八幡の物産品コーナーでは、ソーセイジやニンニクの味噌漬けを購

入。抽選会もあり、充分楽しめた。

そもそもは、郡上八幡の城主が、青山様で、外苑前通りに屋敷があり、梅窓院と言う寺は菩提寺とのこと。青山と言う地名の謂れに納得した。

これから盆踊りのシーズン到来。必ず行く決めてるのは、佃島の念仏踊り、町内の盆踊り、日比谷公園の丸ノ内音頭だ。しかし私は東京音頭しか踊れない。

頬に弾痕父思う日の七草粥 恭子

福島の三春町から新潟の繁華街に引っ越した時期は、記憶が定かではないので断言はできないが戦後すぐの生活であるのに惨めだったとは思いつくことができない。ご飯は麦のいっぱい入ったものだが食べることができた。(いま雑穀とか麦とかが体にいいと云われ食べられているようだ

が、私は一切拒否、戦後の食糧事情を経験している人は見向きもしたくないだろう。)今でこそ食べ物と見られない蓮の実、又筋子数の子等いくらでも売っていた。先日町で『加島屋』の紙袋を見て驚いた。あの新潟の加島屋であった。海鮮雑貨屋だったおみせが東京で素敵な紙袋となつて見られるのは。そんな引越して間もない頃、父の頬とか耳の下にひっ攀れた跡がどうしても気になりだした。なかなかどうして出来たか言わなかったが、私のしつこさに根負けしてしまったのだろう。ぼそぼそと言いだした。上等兵で戦争に満州に行ったようだ。いろいろあったが帰国できた。それから小さいながらも戦争は嫌だとの想いが年を重ねるごとに深まっていった。

苦労を重ねた母が、帰ってきたかった東京にきて五ヶ月で急死した。

そんな下地があつてのことかそれから六十年今でもどんな理由があつても戦争は嫌だ。子・孫にも嫌な経験はさせたくない。経験は重ねることに

意義があると、何処かの方が仰しやるかもしれないがこれだけは駄目だ、と思っている。七草粥を食べると何故か貧しかった頃の食事が目に浮かんでしまう。父ちゃんの傷もついつい目に浮かぶ。それにつけても永六輔さんの死は残念無念！

さるすべり帚で水を掃き移す 喜孝

家から一番近いポストは猫の額のやうな公園の端にある。反対側の端に十センチ余の幹の百日紅がある。花の名の字面そのままに何時までも咲いてゐる。木槿のやうな儂さを全く持たないこの花が好きである。時間が止まり生命力の盛んな花の勢いは、老いた私には元気になるおまじないである。しかしそれでもよく見ると咲き始めや終はりごろには花の数が少なくなるやうだ。盛りの頃は火の粉のやうに花屑をまき散らす。バスに乗る時この下を通る。夜の百日紅も魅力がある。

言葉

藪柑子ふいに心を打つ言葉
 がんばれは嫌ひな言葉鳥帰る
 南瓜咲きつれあひといふ言葉かな
 白衣の天使と言葉をなぞり夏終る
 リハビリ室に沖縄言葉若葉風
 花子は象千の言葉で雪に立つ
 心太あきらめないが合言葉
 言葉尻ひろはれて居る春の風邪

小鳥

初御空ひかりにすはれゆく小鳥
 小鳥屋をバスが過ぎゆく時雨雲
 夜の秋小鳥と金魚ひさぐ店
 手を叩き小鳥逃がせり花満ちて
 白梅にうぐひす色の小鳥ある
 をさな児に小鳥に栗鼠に木の実落つ森
 お降りや小鳥を埋めし土くぼみ
 小鳥らし馬酔木の花のゆれやまぬ
 裏側より啄む小鳥熟れみかん
 粉 きさらぎや粉こぼしつづ豆大福

篠田 純子
 芝 尚子
 定梶じよう
 藤野 寿子
 赤座 典子
 佐藤 喜孝
 齊藤 裕子
 中川 句寿夫
 吉弘 恭子
 田中 藤穂
 竹内 弘子
 山莊 慶子
 堀内 一郎
 森 理和
 竹内 弘子
 早崎 泰江
 森山のりこ
 芝 尚子

粉を吹いて葡萄の房の実りけり
 終の花白粥に粉ぐすり
 清貧といふこと干いも粉をふき
 貝の粉蹴鞠に塗りて春白し
 石洲の毒の粉いろのねずみもち
 こなから

小櫓

二合半をまはし呑みする炬燵かな
 えご小櫓くぬぎの林蟬時雨

小糠雨

類染めし林檎に優し小糠雨
 紅梅の上向きで受く小糠雨
 小糠雨穂に出てゆらぐ草の花
 小糠雨うるしびかりに青芭蕉
 小糠雨さくら餅はや売り切れて
 烏瓜の縞の在る時小糠雨
 小糠雨ビエンナールの案山子かな

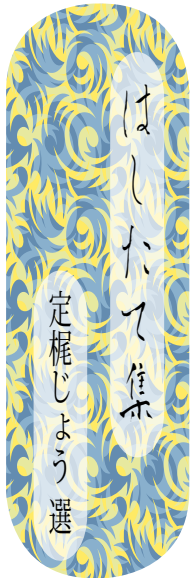
木末

木末まで樗は力満ちて枯る

捏ねる

蕎麦捏て野草を揚げて鄙の里
 土塊を捏ねる工房楠青葉

須賀 敏子
 篠田 純子
 定梶じよう
 篠田 純子
 竹内 弘子
 佐藤 恭子
 早崎 泰江
 松本 米子
 赤座 典子
 芝 尚子
 佐藤 喜孝
 田中 藤穂
 篠田 純子
 七郎衛門吉保
 鎌倉喜久恵
 松本 米子
 田中 藤穂



田中藤穂

青時雨たれかうしろに居るやうな
 われのみの記憶にたわわ小判草
 港まで銀杏新樹の風浴びて
 父の日や折紙の独楽よく回る
 居酒屋の込み合つてゐる梅雨の月

われのみの記憶にたわわ小判草

わが記憶ではこの俵のような実はたわわであった筈と。

港まで銀杏新樹の風浴びて

新樹の風をあびることと街路樹が港までつづくことを

別けてしまった方が。「風浴びる銀杏新樹が港まで」

父の日や折紙の独楽よく回る

独楽を折ることができるんですね。一度みたいもの。

居酒屋の込み合つてゐる梅雨の月

梅雨の夜に晴れ間があつて、それで込み合っているのです。

赤座典子

湯の宿やジャーマンアイリス碑睨す
 バス停の屋根に魚網や五月晴
 栗の花斜面一面白くせり
 峰雲に続く島への石の道
 草笛や「からたち日記」ほしいまま

バス停の屋根に魚網や五月晴

この句と全く同じ景が、私の子供の頃にありました。置一枚分ほどの、海風を防ぐための停留所。管理していた方が漁師だったのです。いま現在でも民家の屋根に魚網をかける景色は、この辺りではめずらしくない。瓦や、昔なら「石置屋根」の損傷を防ぐためなのです。

草笛や「からたち日記」ほしいまま

旅行先の小諸での体験の由。五m四方の葉からちゃんとメロディーが出るのに感嘆しました、とハガキにありました。ただ、「ほしいまま」の語は、幾分ネガティブの意味をもちます。自由自在である、という意から少し離れる。そこまで気にかける必要がないとも言えますけどできたら遣いたくない、ということ。「草笛の曲の「からたち日記」かな」。事実だけを言いたい。

須賀敏子

浜木綿の花投入れて骨董屋
紫陽花を剪りて束ねて雨上がる
朝夕と掃き集めたり花南天
西窓の定家葛の芳しく
この頃は街角にあり山法師

朝夕と掃き集めたり花南天

朝に夕に掃き集めるのは事実なんでしょうが、「朝な夕な掃き集めたり花南天」。「朝夕と」が強すぎるのです。

西窓の定家葛の芳しく

休止するところが欲しい。「西窓の定家葛や芳しく」。

この頃は街角にあり山法師

以前は見なかったが、この頃は街路樹に山法師がある、と。近隣の庭師にうかがったら、街路樹として多くはないが、さほど珍しくないのだ、ということでした。敏子さん同様私も、最近見かけるようになったもの、と思つてたのでした。「この頃は街路樹として山法師」。

大日向幸江

新たなる名を刻みぬる沖縄忌
庭石を遠回りする蟻の列
どの坂も城に繋がる桐の花
一坪の家庭菜園麦藁帽
桃色の梅雨雲被る富士の山

一坪の家庭菜園麦藁帽

余りに判り過ぎるのも句として面白くない。

「麦藁帽家庭菜園一坪で」。但し、「で」を口語臭が

初夏やトンボ鉛筆削り初む

新しい鉛筆を始めて削る時。それがトンボ鉛筆であるのが嬉しい。初夏。

七郎衛門吉保

売地札しばしたのしむ夏野かな
十葉の誰が名づけし鬼つ子名
房総に幾万の房金魚草
少女の手すぐ引つ込める含差草

売地札しばしたのしむ夏野かな

分譲地なのでしょうか。

房総に幾万の房金魚草

幾万の「房」は房総の「房」にかかり、且つ金魚草の花の「房」にもかかっているのでしょうか。

少女の手すぐ引つ込める含差草

本来「すぐ」の語は、「すぐなり」の形容動詞、「すぐに」の副詞、から派生したことですから、「少女の手すぐに引つ込め含差草」、と遣ったほうがや

桃色の梅雨雲被る富士の山

上五から坐五まで休止なく述べられています。「桃色の梅雨雲かかり富士の山」。「桃色」を発見されたのが手柄。

佐藤恭子

山梔子匂ふ雨が降らうと降るまいと
蟻の列またいで過ぎし猫二匹
蕎麦殻を片耳できく梅雨の入
夏の蝶鉢合はせする交叉点
初夏やトンボ鉛筆削り初む

山梔子匂ふ雨が降らうと降るまいと

花に詳しくない私には、雨中も匂うであらう梔子の花の、想像するだに凄さ、と言ったらオーヴァーでしょうか。

わらかくなる、と思うのですが。

蜘蛛の糸結び目の水万華鏡

俳句では「見立て」を嫌う傾向が、殊に「写生」を言い出してから大きくなってきました。でも、その殆んどは平凡に準えているためです。吉保さんの句は、「結び目」と言い「万華鏡」とする、飛躍が妥当適當。雨後の蜘蛛の罫。

秋川 泉

カラカラと笑ふ女ら半夏生
にべもなく断られたり浦島草
この国のゆくへ占ふ蟻地獄
桑の実を摘みむさぼりて白い雲

カラカラと笑ふ女ら半夏生

私なら「カラカラと女ら笑ふ半夏生」としますが。

桑の実を摘みむさぼりて白い雲

「摘む」と「むさぼる」は全く違った言葉。「むさぼる」を補助動詞のように遣うことに違和感があり

ます。「桑の実を摘みて。むさぼり白い雲」、坐五「白い雲」の収まりがいい。

長崎桂子

父と子の機嫌よき声夕暑し
夏暖簾老舗の今を語りをり
走り梅雨町の総出の道整備
赤二輪引立つ梅雨の旧街道

父と子の機嫌よき声夕暑し

「機嫌がいい」のと「夕暑し」の語の間に背馳する処があると思うのです。「父と子の機嫌よけれど夕暑し」。

夏暖簾老舗の今を語りをり

この句も事実だけを言いたい。「夏暖簾今は老舗でありにけり」。

走り梅雨町の総出の道整備

こういう場合むかしも今も、「町を総出の」とします。

赤二輪引立つ梅雨の旧街道

「赤二輪」がいささか無理筋。「二輪車の赤が引立つ梅雨街道」。「梅雨街道」が厭だ、と思うようでしたら、他の言葉を考えてみて下さい。

森 理和

半斤の一枚トースト朝涼し
ご祝儀の阿蘭陀海芋卓の上
人拒む切り立つ淵を燕
奥山の宿に一群都忘れ

半斤の一枚トースト朝涼し

半斤を一枚にトーストする、そういうことがあるのですね。

ご祝儀の阿蘭陀海芋卓の上

「ご祝儀」、の語が生きているでしょうか。

人拒む切り立つ淵を燕

「淵を燕」は燕が淵を飛び交っていますよ」ということなのでしょうが、ありふれた省略の言いよう。

「燕切り立つ淵が人（を）拒む」。

黒澤佳子

空豆の好きな嫁さん若い若い
若冲展額に汗や押されつつ
梅エキス今年は夫も加勢して
夫は餡吾はみたらし団子かな

若冲展額に汗や押されつつ

「若冲展」と先に言ってしまうより坐五に据える方が句が落ちつくと思います。「押されつつ額に汗や若冲展」。

梅エキス今年は夫も加勢して

退官したご主人が、今回は最後まで梅肉エキス作りを助けてくれた、とお葉書にあります。でも句中の「今年」は必要ないと思います。「梅肉エキス夫の加勢を得てつくる」

王 岩

五月晴君の笑顔も晴々し

居酒屋の入り口ゆかし夏柳
そよ風と語らひ揺れる小百合かな
一輪の薔薇を活けるや瓶の中

居酒屋の入り口ゆかし夏柳
句歌、ことに俳句では「ゆかし」などの形容詞の使用は配慮が必要、と思います。遣わないですむならそれに越したことはないわけです。「居酒屋に入て入り口に夏柳」。

そよ風と語らひ揺れる小百合かな

すでに「そよ風」を言っていますので「揺れる」は、言はずもがな。「そよ風と語らうてゐる小百合かな」。

中川句寿夫

梅雨出水母が預かる父の印
父に父あり健在のバナマ帽
灯台に照る日曇る日杏子熟れ
のど飴は噛まざり梅雨に中休み
稽古笛棚田棚田の穂肥かな

父に父あり健在のバナマ帽
バナマ帽もまた健在なのです。

のど飴は噛まざり梅雨に中休み
のど飴は噛んだらいけないわけですけど、でも意識しなかったら噛んでしまう。ですから作者は意識しているわけ。そして、この晴れ間は、あア梅雨の中休みだなア、と気がついた。連関のない二物を取りあわせる。俳句の醍醐味。機微。

稽古笛棚田棚田の穂肥かな

棚田では、追肥を施すにも一枚一枚田んぼを移動しなければならぬ。作業が煩雑化する。そんな時笛の音が。祭礼の稽古なのである、と。

佐藤喜孝

影濃ゆし突く音なくとも羽子日和
はらとちりはらはらと花しじまかな
さそはるるやうにひとひら木を離れ
あじさゐのゆくさきぎきの文目かな
鴉鳴き雀の鳴かず梅雨の朝

影濃ゆし突く音なくとも羽子日和

なるほど。追ひ羽根の音に関わらず正月の晴天は羽子日和なのです。

はらとちりはらはらと花しじまかな

「しじまかな」が嫉妬を感じるほどうまい。

あじさゐのゆくさきぎきの文目かな

梅雨どきは何処へ行つても紫陽花。それが「ゆくさきぎき」。色の多彩さは御存知の通り。しかも変化する。それが「文目」。



題詠シリーズのおしらせ

「暮」

締め切り 十月末日

三十句

ご参加お待ちしております。

原爆の日

人類が一九四五年八月六日・九日、地球に原爆を使用した日。そして八月十五日の終戦・敗戦記念日へと暑い日が続く。「あを」にもさまざまなおもひを込めて俳句が発表されてゐる。

原爆の日一本の棒喉にあり 鎌倉喜久恵
だうにも消化できぬ苛立たしき。

名水を含む済まなさ原爆忌 篠田純子
この日は殊更に思ひを濃くする。

叩かねば鳴らぬラジオよ原爆の日 芝 尚子
当時、ラジオは情報源の太い筒であった。情報の質はともかくとして。

原爆の日結婚に踏み切らぬ友 森 理和
人々の上にいまも消ゆることなく覆ひ被さつてくる。

素麺を茹でて原爆の日の暮れる 須賀敏子
けふは原爆の日だ!!と思ふ。いまの生活をしみじみと振り返りつつ。

八月の李語

六十余年原爆の日の終りなく 赤座典子
原爆の日に終りは無い。次の原爆使用と云ふあやまちを人類が行つても。

原爆の日のかげろひに黙祷す 早崎泰江
この「かげろひ」は人類が作り出した「かげろひ」である。

燈籠を流し原爆の日を祈る 長崎桂子
祈ることしか出来ぬわれわれ。

落つるもの払へば松葉原爆忌 定梶じょう
些細なことにも過敏になる日である。

おんおんと鴉水浴び原爆忌 田中藤穂
「おんおん」は哭声か誦経か。いつまでもおんおんと続く。

原爆の日テレビに向きて黙祷す 東亜未
昔日のラジオ、今日のテレビ。黙祷。

原爆忌のおの水を持ち歩く 堀内一郎
渴きの苦しさ、飢餓の苦しさ。忘るることではない。
(佐藤喜孝)

傳句会

席題 葦簣

七月十二日

カフェ傳

七夕や青き地球にテロリスト 敏子
魚力の葦簣に絶えず水流る 敦子
遠浅の葦簣囲ひに子の叫び 吉保
離るがまま土におちつく夏落葉 恭子
亀ひとつ転げ落ちたり梅雨晴間 綾子
夕立の土の匂ひや網戸越 佳子
葦簣立てささやかに世を遠ざくる 直子
朝顔は青色の鉢投票日 理和
佃島葦簣の陰に猫二匹 藤穂
葦簣陰はすのにほひの風の来る 純子
かくれんぼ葦簣の陰に足が見え 泉
道草の蟻に私雨当る 喜孝

あをやぎ句会

七月十六日

京橋プラザ区民館

手のひらの大きをぢさん踊りけり 純子
夏帽子取りてコミュニケーション過剰 大佳
白靴や若冲展に並ぶ朝 慶子
終の色残し花梨の花落下 恭子
蝉生まる曙杉の一合目 敦子
花茗荷朝一番に活けにけり 佳子
世の中は知らずぼとりと白木槿 綾子
里山の雨を弾いて青葡萄 幸江
母の服似合つてうれし布袋草 京子
涼しさよ水族館の海深し 恵子
かみきり虫しやしんにとつてにがしたよ げんき
待たされし犬が空見る墓参り 直子
水の中に水のかたまり夏盛ん 喜孝

あとがき

は

したて集は十月締め切分で早くも一年が経つ。じょうさんに指摘されてもうさうなるのかと驚いた。選者と投句者との交流も伺へ私の期待以上の成果が上がってゐる。じょうさんのご厚意に甘え4月締め切りまでお願いした。快くお引き受けいただいた。

扉

の一郎兄の掲載俳句を探してゐたら、同じ号にわたしはなんと短歌を発表してゐた。記憶から消えてゐた。大和と題して六首もある。よく許してくれたものだ。

の薨

室生寺の磴を数へし少女二人息はづませて参
百四拾五よと云ふ

“首”などおこがましい出来である。しかしこの
短歌擬きを読んでふつつつと蘇るものがある。

七

月号の奥付が六月号のままであった。森直子さんに指摘されあらためてわたしの粗忽なこととは重々分かつてゐたのだが……。梅雨の鬱陶しさに責任を転嫁するしかない。

御厚志多謝

斧田綾子様 田中藤穂様

〈喜孝〉

二〇一六年八月号

発行日	八月五日
発行所	東京都中野区中央2・50・3
電話	090・9828・4244
ファックス	03・3371・4623

印刷・製本・レイアウト

カット／松村美智子・テイリエイマ 竹僊房

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円（送料共）／一年
郵便振替 00130・655526（あを発行所）

乱丁・落丁お取替えます。